

大学等における領域「言葉」の指導の方向性について
— 保幼小接続カリキュラム（アプローチカリキュラム）に着目して —

本 家 太

Directions of Language Domain Education in Universities
— Focusing on the Curriculum Continuity between Early Childhood Education
and Elementary Education —

Futoshi HONKE

広島文化学園大学 学芸学部 紀要 第15号 (11頁 — 16頁)

2025

Reprinted from

BULLETIN of the HIROSHIMA BUNKA GAKUEN UNIVERSITY
Faculty of Arts and Sciences

Vol. 15 pp. 11-16 2025

Hiroshima, Japan

大学等における領域「言葉」の指導の方向性について
— 保幼小接続カリキュラム（アプローチカリキュラム）に着目して —

本 家 太

Directions of Language Domain Education in Universities
—Focusing on the Curriculum Continuity between Early Childhood Education
and Elementary Education—

Futoshi HONKE

This paper examines directions of “language domain education” in university programs for early childhood educators, with a particular focus on curricula continuity which is developed collaboratively by preschools, kindergartens, and elementary schools. While university programs have been structured around core curricula, the degree of emphasis placed on practical, activity-based learning varies widely from institution to institution. By examining the needs reflected in curricula continuity, this paper aims to stimulate discussions on how we could enhance language domain education programs in universities. The author argues that universities should not only collaborate with other higher education institutions but also strengthen partnerships with preschools and kindergartens to develop more effective teacher education.

キーワード：

領域「言葉」 Language domain,

保幼小接続カリキュラム Integrated early childhood and elementary education curriculum,

保育士養成課程 Early childhood education and care teacher training program, シラバス Syllabus

所属：

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

1 はじめに

「小1 プробレム」の問題を受け、平成22年（2010年）に文部科学省から「幼児期の教育と小学校の教育の接続について」¹⁾ が示されて、四半世紀が経過しようとしている。教育現場では、教育委員会の後押し等を受け、小学校区ごとに、保育園、幼稚園、幼保連携型認定こども園、小学校が連携して問題解決にあたるための定期的な会議を開催し、接続カリキュラムの作成、幼児と児童の交流会の実施等、保育園・幼稚園等と小学校の円滑な接続を図る取組が継続的に行われるようになってきている。

そうした中、平成29年（2017年）に『保育所保育指針』が改訂²⁾ され、養護だけでなく教

育を行う施設としての位置付けが明確になり、小学校入学の前段階の教育が、幼稚園や幼保連携型認定こども園と同様、保育園においても意図的に行われるようになった。

さらに、教員養成の質保証という観点から、保育士、教員を養成する大学においても様々な反省的検討が進められ、平成29年（2017年）に「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」から「教職課程コアカリキュラム」³⁾ が示された。保育士、幼稚園教諭の養成課程をもつ大学、短期大学、専門学校においては、教職課程を編成する際には「コアカリキュラム」の内容を踏まえ、大学等や担当教員による創意工夫を加え、体系性をもった教職課程を構築しているところである。

『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』等には、乳幼児の心身の発達を総合的に捉え、保育者が保育活動を行う際の指針となるものが、5つの領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」に分けて示してあり、近年、こうした内容についての研究が積極的に行われるようになってきている。中ノ子⁴⁾によると、平成29年(2017年)以降、領域「言葉」に関する研究は飛躍的な増加傾向にあり、そのテーマは、「保育者養成」「小学校との接続」「絵本」「要領・指針」の4つのテーマが7割以上を占めていることが分かるとしている。

本稿では、言葉の獲得に関する領域「言葉」について、保育者を養成する大学等の教育課程における指導について、その方向性を探りたいと考えている。それ故、教育現場のニーズを把握するため、小学校区ごとに小学校と保育園・幼稚園等が作成している保幼小接続カリキュラムに着目するとともに、保育士養成課程をもつ大学等のシラバスに着目し、領域「言葉」の指導法に関する大学での授業の方向性について考察していくことを目指すこととする。

2 研究の方法

(1) 保幼小接続カリキュラム

広島市にある140の小学校区に、広島市教育委員会を通じて保幼小接続カリキュラムの共有協力を依頼した。これは、小学校区の中で、保幼小の円滑な接続を目的として、小学校区の中で、保育園、幼稚園、幼保連携型認定こども園と小学校が連携を推進しているからである。なお、依頼した140校のうち、協力を得ることができたのは125小学校区であった。

(2) 大学等のシラバス

広島市内の保育園、幼稚園等に多くの教員を輩出している広島県内の保育士及び幼稚園教諭養成課程をもつ大学等のホームページから領域「言葉」の指導法に関する授業のシラバスを収集した。15校の大学等のうち13校についてシラバスを得ることができた。

また、全国的な傾向を把握することを目的として、Googleを用い、「シラバス」「言葉」「指導法」のキーワードを入力し、表示されたシラバスのうち、過去3年以内のシラバスを30校分収集した。

(3) 保幼小接続カリキュラムの分析方法

保幼小接続カリキュラムには、保育園・幼稚園等の年長のカリキュラムがアプローチカリキュラムとして、小学1年生のカリキュラムをスタートカリキュラムとして、円滑な接続が見えるように並べて示してある。ここから、現場の実践レベルで保育園、幼稚園等と小学校が連携して指導する際に、特に焦点を当てて指導しようとしている内容を探ることができるのではないかと考えた。各領域の内容については、全ての内容を保育園、幼稚園等において計画的に指導することになっているが、保育園、幼稚園等と小学校では継続的な情報交換、協議を行い、特に力を入れていく必要があると判断した内容について、教育の円滑な接続が見えるよう精選して示している。

多くのアプローチカリキュラムには、「育てたい姿」とそのための「活動」が示されているが、活動については方法であることから、「活動」に着目しつつ、「育てたい姿」の記述から領域「言葉」の内容に関するものを集計した。その際、5つの領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」に示されている内容の経験については、遊びや生活の中で一体的に展開されるものであり、5つの領域の内容はよく似た表現になっているものがある。

例えば、領域「人間関係」の内容である「(6)自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。」と領域「言葉」の「(3)したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。」である。相互に理解し合うことについて、人間関係という面とそこに介在する言葉という面から表現されており、言葉の性質上からも区別をはっきりさせることが困難である。そこで、一緒に示されている「活動」等も参考にしながら、領域「言葉」の内容に関わっていると解釈できるものについては、領域「言葉」の内容に関するものとして集計した。また、アプローチカリキュラムの中にも、小学校で多く使われてきた「伝え合い」という文言が多く使用されている。その場合は、領域「言葉」の内容「(3)したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。」「(4)人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。」の両方の内容に係しているものとして整理して集計した。(表1参照)

表1 保幼小連携接続カリキュラム
(アプローチカリキュラム)に見られる
領域「言葉」の内容

領域「言葉」の内容	小学校区	割合
(1)先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。	22校区	17.6%
(2)したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。	79校区	63.2%
(3)したこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。	105校区	84.0%
(4)人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。	41校区	32.8%
(5)生活の中で必要な言葉が分かり、使う。	20校区	16.0%
(6)親しみをもって日常の挨拶をする。	16校区	12.8%
(7)生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。	2校区	1.6%
(8)いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。	66校区	52.8%
(9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。	3校区	2.4%
(10)日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。	17校区	13.6%

(4) 大学等のシラバスの分析方法

各大学等のシラバスに示された授業の概要、達成目標を踏まえ、授業計画に示された各回の内容から、領域「言葉」に示された内容についての指導がどのように進めようとしてされているか状況を把握した。教員としての実践的な指導力を身に付けさせる観点として、読み聞かせ等の実演や教材作成を学生に身に付けさせる学習活動を設定しているもの、指導案の作成について位置付けているもの、模擬保育を位置付けているもの、さらには、それらが領域「言葉」のどの内容について実施するものであるか整理した。

(表2・表3参照)

あくまでもシラバスは授業の到達目標や事前の計画を示すものであって、その内容までの的確な把握は困難であるというシラバス分析の限界性を認識しておく必要がある。しかし、授業担当者が履修者を把握する前に計画段階として掲げている到達目標やそこに導くために必要だ

と考える授業内容や傾向を把握することができると考えた。

表2 シラバスから読み取ることができる
実践的な指導の内容(広島県内)

実践的な指導の内容	実施大学等	割合
児童文化財による演習	12校	80.0%
指導案作成	5校	33.3%
模擬保育	4校	26.7%
指導案作成・模擬保育の内容表示	0校	0.0%

表3 シラバスから読み取ることができる
実践的な指導の内容(全国抽出)

実践的な指導の内容	実施大学等	割合
児童文化財による演習	18校	60.0%
指導案作成	19校	63.3%
模擬保育	17校	56.7%
指導案作成・模擬保育の内容表示	0校	0.0%

3 結果と考察

(1) 保幼小接続カリキュラムに見られる領域「言葉」の内容

広島市にある125の小学校区の保幼小接続カリキュラム(アプローチカリキュラム)に見られる領域「言葉」の内容は表1のとおりであった。「小1プロブレム」の問題に対応し、保幼小の接続を円滑にするために、保育園・幼稚園等の段階で何が特に意識して指導が進められているか見て取ることができると考えている。

特に多く見られた領域「言葉」の内容は、「(2)したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。」「(3)したこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。」であった。それぞれ79の小学校区、105の小学校区の計画に見られ、それぞれ全体の63.2%、84.0%を占めている。保育園・幼稚園等より大きな集団である小学校の中で生活や学習を行うためには、言葉で表現したり、尋ねたりすることができることが大切であると考えられていることがよく分かる。また、小学校においては、児童の生活や学習をより良いものにするため、多くの学校で「伝え合う」ことを大切に取り組んできた経緯があり、そのことが、保育園・幼稚園等にもつながっているとも考えられる。

次に多く見られたのが「(8)いろいろな体験を通してイメージや言葉を豊かにする。」であっ

た。66の小学校区52.8%の計画に見られる。保育園、幼稚園等においては、遊びや活動の中で様々な内容を身に付けさせることを基本にしている。こうした経験は、小学校に上がってから、日常の言語生活や国語科だけでなく、生活科や図画工作科などにつながっており、発達の根幹をなすものであることから、意識的に指導を進めようとする傾向が強いことをうかがい知ることができる。

(2) 大学等における領域「言葉」の指導法の授業

広島県内の大学等のシラバスから読み取ることができる実践的な指導の内容は表2のとおりであった。

児童文化財による演習を行っている大学等は多く、15校中12校、80.0%の大学等で指導が行われる計画になっていた。絵本や紙芝居、シアターなど「児童文化財」と呼ばれる教材を作成したり、実演したりするという計画である。一方、広島市の多くの小学校区の保幼小接続カリキュラム（アプローチカリキュラム）には、「(9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。」は3つの小学校区に限られ、全体の2.4%にとどまっている。

平成13年（2001年）に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布・施行されて以来、全国の教育機関では積極的に子供の読書活動を推進しており、現在も保育園・幼稚園等、小学校において、読み聞かせ等が盛んに行われている。このことから、保育園、幼稚園等で読み聞かせ等が行われていないということではなく、よく行われていて、敢えて保幼小接続カリキュラム（アプローチカリキュラム）に位置付ける必要がないと考えられていると捉えるべきであろう。80.0%の大学等において、児童文化財による演習が行われており、こうした授業を経験した保育者によって、本の読み聞かせ等は保育園・幼稚園等で十分に行われていると考えられる。実際、筆者が小学校に勤務していた際、新1年生の教室で読み聞かせが始まると、子供たちが読み聞かせに集中する場面を数多く見ることができた。大学等で、時間を確保して実演して学んだことが、多くの保育園・幼稚園等での実践に位置付いているのであろう。

大学等のシラバスから読み取ることができる実践力に焦点を当てた活動としての「指導案の作成」や「模擬保育」については、それぞれ5校（33.3%）、4校（26.7%）にとどまっている。

「教職課程コアカリキュラム」には、保育内容の指導方法と保育の構想についての到達目標として、「3）指導案の構成を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。」「4）模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。」が示されている。しかし、実際には半数以上の大学等でこうした学びがないまま、いきなり教育実習に出ることになり、現場教員の指導上の負担や学生の実習における学びを充実させるという点では課題である。

全国の抽出した大学等のシラバスから読み取ることができる実践的な指導の内容は、表3のとおりであった。

児童文化財による演習を行っている大学等は、30校中18校、60.0%であり、広島県内の大学等と比較すると（表2と表3の比較）、32ポイント低い。逆に「指導案の作成」や「模擬保育」については、19校（63.3%）、17校（56.7%）と多く、広島県内の大学等と比較すると、それぞれ30ポイント高くなっている。全国的には、より実践的な指導を内容にしている大学等が広がっていることがうかがわれる。

他方、牛渡⁵⁾は、「教職課程コアカリキュラム」の作成の経緯とその課題について次のように述べている。アメリカで作成されている教員や校長のための「専門職基準（スタンダード）」の特徴（①共通の枠組みによる質保証、②作成過程への当事者による参加の保証、③関係者の合意づくり）を例に挙げ、コアカリキュラムの価値を認めながらも、学会等の専門団体との連携を視野に入れ、十分な納得と合意を得る努力が必要であったとしている。また、源ら⁶⁾は、保育者養成校における担当教員の専門分野の実態調査から、保育内容「言葉」を担当する教員の専門分野については、保育学・幼児教育学に関連する分野、心理学に関連する分野、国語教育学や文学に関連する分野という主に3つの研究領域に大別されることを報告している。

絵本の読み聞かせのように児童文化財を使って幼児が楽しむことができる場を作ることについては、数多くの文献が見られ学生への指導を比較的構想しやすい。しかし、保育園・幼稚園等における指導は、活動や遊びの中で、その幼児にあった個別の指導を行うことが求められる。指導案の作成、模擬授業においては、幼児の個々の実態や扱う内容を元に構想することになる。例えば、絵本の読み聞かせという活動を

通して、「(2)したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。」ことを指導する場合、この内容について一人一人の幼児の実態を把握し、それに応じた指導を構想することになるのである。保育学・幼児教育学に関連する分野を専門とする教員にとっては、具体を示して指導案の作成や模擬保育を学生に課すことは比較的实施しやすいが、その他の分野を専門にしている教員には時間と労力を要することになる。

こうした中、領域「言葉」における幼児への指導の在り方を模索して、その考え方や実践的な取組について言及する論文も多く見られる。棚橋ら⁷⁾は、新科目のシラバス構成に寄与させることを目的に、領域「言葉」のねらい及び内容に即し、気持ちを言葉で表現すること、作文学習、言葉で伝え合うことに関わる専門的研究知見を報告している。また、岡田⁸⁾は、「思いを伝える幼児の育ちと教師の援助を関連付けた表」を活用していくことで、幼児の育ちについて教師間で共通理解し、同じ認識の基に連携を図りながら成長に応じた適切な援助を行うことにつながったことを報告している。思いを伝える幼児の育ちを「①思いをもつ②思いを出す③一方的に自分の思っていることを伝える④相手に分かるように伝える」の4段階に分け、それぞれ幼児の具体的な姿、幼児の思いの読み取り、教師の援助を対応させて整理している。思いを伝える幼児の姿や教師の援助が継続的に記録した表が添付されており、指導案作成や模擬保育を構想する上で参考になる資料である。

表2、表3において、指導案作成・模擬保育の内容を表示している大学等はないことが分かる。具体の指導を構想する指導案作成・模擬保育においては、指導する内容について、幼児の実態がまずは前提となる。そして、遊びや生活などの中で言語活動を通して内容を指導することになる。遊びの場面での言葉や読み聞かせの場面での言葉について、幼児の言葉の状況からどのような言語使用者を育てるのか構想し、具体的に指導過程を検討する力をもつことができるようにすることが求められていると考えられる。

4 おわりに

保育士養成課程をもつ大学等の領域「言葉」の指導法の在り方について、保幼小連携プログラム（アプローチカリキュラム）、大学等のシ

ラバスを分析、考察してきた。コアカリキュラムについての共通理解が広がること、そして、指導案作成や模擬保育の指導の在り方をさらに充実・発展させていくことが求められる。筆者は、小学校における授業改善を長年に渡って進めてきた。一朝一夕にはいかなかったが、継続的な取組により、気が付けば大きく進展していた。大学等においても、保育者のより良い育成を目指し、これまで以上に保育現場の実態の把握に努め、大学等、そして担当教員の連携により、広く授業の質的保証を図ることができるよう尽力していきたい。

【要旨】

本稿では、保育士、幼稚園教諭等の養成課程をもつ大学等のシラバス及び保育園、幼稚園等と小学校で作成している保幼小接続プログラムに着目し、領域「言葉」の指導法に関する大学等での授業の方向性について考察した。大学等においては、教職課程コアカリキュラムを基に大学等や担当教員による創意工夫により、体系性をもった教職課程を構築しているところであるが、シラバスに見られる実践に焦点を当てた活動の計画は大学等によりばらつきがあった。保幼小接続カリキュラムに見られる教育現場のニーズに着目することは、それぞれの大学等における教育課程や授業を充実させる動きを推進させるものである。大学等は大学等間の連携にとどまらず、保育園、幼稚園等との連携を一層活性化させる必要があると考えた。

【謝辞】

本研究の調査に当たり御協力いただいた広島市教育委員会指導第一課の皆様、そして、論文の方向性や内容・表記等について丁寧な御助言いただいた、勤務大学の植田敦三教授、達川奎三教授、藤金倫徳教授に厚く感謝申し上げます。

【参考文献】

- 1) 文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の接続について」2010
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/cho usa/shotou/070/gijigaiyou/_icsFiles/afieldfile/2010/06/11/1293215_3.pdf
(2024年9月30日最終閲覧)

- 2) 厚生労働省『保育所保育指針』2017
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1
(2024年9月30日最終閲覧)
- 3) 教職課程検討委員会「教職課程コアカリキュラム」2017
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afielddfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf
(2024年9月30日最終閲覧)
- 4) 中ノ子寿子「テキストマイニングによる保育内容『言葉』の研究の動向分析と展望」：CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて『尚絅大学研究紀要 人文・社会科学編』第56号, 2024, pp.97-106
- 5) 牛渡淳「文科省による『教職課程コアカリキュラム』作成の経緯とその課題」：CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて『日本教師教育学会 年報』第26号, 2017, pp.28-36
- 6) 源証香, 小谷宜路「『保育内容』研究のあり方に関する一考察」：CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』巻3, 2014, pp.9-15
- 7) 棚橋尚子, 宮下俊也, 横山真貴子「教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成(4)」：CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて『次世代教員養成センター研究紀要』4, 2018, pp.255-258
- 8) 岡田幸子「思いを伝えることができる幼児を育てるための援助の工夫」『平成27年度広島市教育センター研究紀要』, 2016